
第四回SSバトル企画・会場

SSバトル企画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第四回SSバトル企画・会場

【Nコード】

N3087I

【作者名】

SSバトル企画

【あらすじ】

SSバトル企画とは各作者が書いたSSを持ちより投票で優劣を競う企画です。各章・各作品ごとに作者は異なります。下の掲示板から投票できます。ご参加お待ちしております。

ルール詳細

以下参加作者となります。

- ・天野雀
- ・蜻蛉
- ・阿武都龍一
- ・黒木猫人
- ・島本静波
- ・双色
- ・あまつばめ
- ・ろりら

(順不同・敬称略)

各章につき一作、この中の作者がSSを書いて投稿しています。

対戦カードは同じアルファベットが頭についている作品です。

【！】 投稿期限切れにつきひとつの作品が不戦敗となりましたので、Bグループが三つ巴の特殊編成となりました。

【！】 作品の作者が誰だったのかは、企画開始から八日後（投票は七日間）に投票数と勝敗を記入した一覧と一緒に発表いたします。

【企画維持に関するルール】……知らなくてもわりと問題ありません

- ・読者参加型の企画です。

参加作者は3000字以下のSSを書き、それに対して読者は投票をします。

- ・参加作者は各回ごとに異なります。

毎回、一対一の対戦カードが数試合、すべてタイマンとなります。

・「お題」は作中にそのものが出てくるか、あるいはお題を想起させる内容であることが最低条件となります。

・投票期間は作品発表から一週間です。

投票期間が終了しましたら、サイトで組み合わせ別に勝者を発表します。

・対戦表はSSタイトルだけの表記になり、読者および参加作者も主催者を除き対戦相手を知らないものとします。

・また、作者を隠すため作品の掲載は特設アカウントからのものとなります。

・投票の形式上、事前の企画参加等の意思表示は必要ありません。

【投票方法】……必読！

・ルールを守らない書き込みは企画ルールを知らないものとして、集計から除外します。

・投票は特設掲示板から行います。

移動は小説トップにある「投票・感想用掲示板」からお願いします。

・あらかじめ各SSタイトルのスレッドを立てておきますので、そこへ書き込みをしてください。

・投票する際は本文の最初に【投票】と書き込みを行ってください。

（もちろん投票だけでも構いませんが、感想なども作者の方にも喜ぶと思います）

・また投票はしなけど一点入れたい、

という場合はやはり冒頭に【ナシ】という書き込みを行ってください。

（加点方法の詳細は【投票に関するルール】を参照してください）

・基本的に『小説家になろう』のサイトにある感想欄は使用いたしません。

【投票に関するルール】……できれば読んでいってください

『投票基準』…投票基準は「どちらのSSがより良かったか」です。

その際、投票は客観意見（批評等の観点）ではなく、

主観意見（『自分にとってどれが一番良かった』）をお願いいたします。

『投票権』…参加読者の投票権は一組に対して一票。

つまりひとりにつきその回行われた試合分の投票権があります。

『投票権・補足』…すべてのSSを読む必要はありませんが、投票する際は自分が投票する対戦カー

ドの作品は必ず読んでください。

『加点方法』…得点の計算は一票につき+2点。評価欄に書きこまれた時点で+1点。

つまり票を入れると、その時点で書き込んだことにより1点、

更に一票が入ったことで+2点で計3点となります。

『加
点方法・補足』…また票を入れるほどじゃないけど気に入
った、

みを残してもらえれば

という作品があれば掲示板に書き込

組みです。

上記の加
点方法上、点数に繋がる仕

のを参照してください）

（投票方法に関しては【投票方法】

【A】毎年、名月の夜は（前書き）

この小説は【対戦カードA】の組み合わせです。
対戦相手は『月のいきもの』となります。

以下企画サイトのルールの項目から抜粋。
もっと詳しいルールは企画サイトか目次欄最初にある『ルール詳細』
のほうにあります。

【投票方法】……必読！

・ルールを守らない書き込みは企画ルールを知らないものとして、集計から除外します。

・投票は特設掲示板から行います。
移動は小説トップにある「投票・感想用掲示板」からお願いします。

・あらかじめ各SSタイトルのスレッドを立てておきますので、そこへ書き込みをしてください。

・投票する際は本文の最初に【投票】と書き込みを行ってください。

（もちろん投票だけでも構いませんが、感想なども作者の方
も喜ぶと思います）

・また投票はしなけど一点入れたい、
という場合はやはり冒頭に【ナシ】という書き込みを行って

ください。

（加点方法の詳細は【投票に関するルール】を参照してください）

・基本的に『小説家になろう』のサイトにある感想欄は使用いたしません。

【A】毎年、名月の夜は

「どうするんだよ、姉さん……流石にこの量は大変だなあ」

テーブルの上にこしらえた山盛りの団子をぱくつきながら、僕は姉さんに不平を漏らす。

今夜は中秋の名月。十五夜の晩、我が家では毎年、お団子をホームメイドするのが伝統だった。

王道の餡、シンプルに砂糖、ちよつとばかりのきな粉、全体の割ほどは何もかけない。最後のは僕のこだわりで、舌休めにちょうどいいのだ。

姉さんはジャムをつけて食べている。流石は甘党、団子にも付けるとはやるねえ。

「え、大変……かなあ？ 去年も似たようなものだったじゃない」

「そんなことないよ。数は……同じくらいだったかもしれないけど、一つ一つは小さかったじゃないか」

「うーん、そうだったけ？ 言われて見れば、大きいのが多いわね。のめり込んだじやうと、ついついやりすぎちゃうのよねえ」

姉さんの無計画ぶりには困ったものだ。毎回フォローをする僕の身にもなつて欲しい。

「僕、途中で止めたんですけど？ もうそろそろ終わりにしようって言ったのに聞く耳もってくれないし」

熱中し始めるとなかなかやめてくれないのが姉さんの癖だった。以前に晩御飯を作ったときだって、一体何人分なんだと疑いたくなるくらいの量だったしね。とにかく加減がヘタクソなんだ。

「ごめんごめん、反省はしてるわよ。一応」

「……心優しい弟でよかったね。いつもいつも似た失敗してるのに、許してもらえるなんて稀だよ」

「まあ生意気。あんたのきな粉にジャム付けるわよ」

そ、それだけは勘弁だ。というより、姉さん！

「きな粉馬鹿にしてるだろっ？ このほのかな甘みと絶妙な粉感触、たくさんまぶそうとしても中々しつかり付かない、ちょっと反抗期っぽく見えるこの調味料、馬鹿にしてるだろっ！」

「あーあー、ごめんなさい。悪かったわよ。あんたきな粉好きだもんね」

「当たり前。きな粉あれば生きていけるよ」

親指を立てると、姉さんに苦笑された。

「まったく。あんた、お姉ちゃんときな粉が溺れてたらどっちを助けるのかしらね？」

「きな粉」

「即答しないでよ！ たった一人の肉親じゃない！」

姉さんが本当に悲しそうな表情を浮かべたので、ちよつとふざけすぎたと思った。

「う、ごめん。本気じゃないから……何とか両方助けるよ」

「せめてお姉ちゃんからにしてね！？」

それは難しいところだが、善処しよう。

喋っているうちに、だいぶお団子が減ってきた。皿の上に補充のきな粉をまぶし、喉を潤すお茶も補給する。

「姉さんもお茶いる？」

見ると、姉さんは少しえらそうな、苦笑いを作っていた。

「うーん、もらうけど……そろそろ気分が悪くなってきたわ。最初は平気だったのになあ……」

段々厳しくなってきた、と。

言い訳は聞かないぞ、姉さんよ。最初と言ってることが違うじゃないか。

「去年も似たようなものだったろ？ あんなに楽しそうにやっておいて、そりゃないよ。お団子もう少しなんだから、頑張つてよ」

放っておいたら硬くなってしまう。適度な弾性を失ったお団子なんて、延びたラーメンみたいなものじゃないか。食べがいもないし、食べ物自体にも申し訳ない。僕はきな粉信者っただけじゃなく、食

物関係全般を残すことは大嫌いなのだ。

「わ、分かったわよ。でもちよつと視線外すから。盛ってあるの視界に入れたら、ゲ——」

「それより先のカタカナ禁止」

釘を刺した、

「食道から競り上がったモノを、口内から吐き下しちやいそう」
けど無駄だった。

「事細かに言わないでよ！ 何で説明したがるのさっ」

まったく汚いと思いながら、僕は餡入りの団子を堪能する。うーん、やっぱりこし餡に限るね。粒餡も捨てがたいけど、やっぱり滑らかさには敵わない。

「う——けふつ。ごめんもう無理アンタ食べて」

早口でそう言うと、姉さんはお腹をさすり始めた。

「す、すごいわねえ。感心するわ。よくそんなに食べられるね？」

「そりゃ、お団子を作るとき、僕はきねを使ってたからね。体力使うもの。お腹ペコペコだよ」

喋っていたらもつとお腹が空いてきた。姉さんの皿に載った分まで手を伸ばす。まあ最初から、このくらいは余裕なのだけど。

「そうじゃなくて。それだけ平然なのが凄いなと思ったの」

拍手を送られそうほどの賞賛だった。

いやだな、姉さん。

「毎年こうじゃないか。今年はちよつと量が多いだけだろ」

「だ、だから。いつもの量だとテーブルに座ると見えないでしょ？」

アタシ、冷静な時は結構フツーだったみたい……」

あれ、意外な事実だ。

「そんなに気になるの？ 真横に死体があるくらいで」

最後のきな粉にばくつき、しっかりと噛み締める。甘味をじっくり堪能した後、僕は立ち上がった。

「まあいいや。食べ終わったし、片付けに行こう」

うすときねを持って、庭に出る。

姉さんと二人で、キッチンに一時置いていた死体たちを運ぶ。同族の死骸でも、見ると結構グロテスクだな。きねで殴った所なんて、骨が砕けて陥没してるし。

まあ、埋めやすいようにもつと砕くけどね。

まったく、うすときねって便利だ。

硬い骨も難なく砕けるし、構造上どこかに飛んでいくことも少ない。細かくすれば処理するのは案外楽なのだった。

「姉さん、頼むよ」

「うん」

中に放り込まれた、千切れた腕に向かって思い切りきねを叩きつける。ぐち、という鈍い音と共に血も飛び出た。

それが姉さんの、白くふさふさしたほっぺに散ってしまう。

――後で拭ってあげなきゃ。

そうやっていくらか処理した後、ふと首を上げた。

いつの間にか、遠くの雲が晴れている。きっと今夜は、ずっと向こうからでも、こっちが見えるに違いない。

「ママー、お月さま、きれいだね」

「そうねえ。あ、ほら。ウサギさんもお餅つきをしてるわよ」

【A】月のいきもの（前書き）

この小説は【対戦カードA】の組み合わせです。
対戦相手は『毎年、名月の夜は』となります。

以下企画サイトのルールの項目から抜粋。
もっと詳しいルールは企画サイトか目次欄最初にある『ルール詳細』
のほうにあります。

【投票方法】……必読！

・ルールを守らない書き込みは企画ルールを知らないものとして、集計から除外します。

・投票は特設掲示板から行います。
移動は小説トップにある「投票・感想用掲示板」からお願いします。

・あらかじめ各SSタイトルのスレッドを立てておきますので、そこへ書き込みをしてください。

・投票する際は本文の最初に【投票】と書き込みを行ってください。

（もちろん投票だけでも構いませんが、感想なども作者の方
も喜ぶと思います）

・また投票はしなけど一点入れたい、
という場合はやはり冒頭に【ナシ】という書き込みを行って

ください。

（加点方法の詳細は【投票に関するルール】を参照してください）

・基本的に『小説家になろう』のサイトにある感想欄は使用いたしません。

【A】月のいきもの

月面調査に行ったはずのマイケルが帰ってこない。宇宙ステーションの話題は、三日ほど前からそれで持ちきりだった。それが今日になって、突然電報が入った。月面へ着陸したと思われるマイケルの宇宙船からの信号だった。生存が確認されたことにより、クルーはひとつの佳境を越えたと安堵の息を漏らしていた。

「一体マイケルはどうしたんだ。予定されていたカメラは？」

「どうやら故障で失ったらしい。それに、電報の中にはこんな一文があったぞ」

マイケルの同期である日本人の木村が、渡された資料に目を通すと、腹からこらえきれない笑い声を上げた。

「はっはっは！ マイケルは何をいつているんだ。月の生物に手暖かく歓迎を受けたので、連絡が遅れたのだと？」

「どうやらそのようだ。この報告を受けて、上が第二次調査隊を月へ送ろうとしている。お前にその矢が立つかもしれないぞ」

「ほう、それは面白い。俺がこの目で直接見てこようじゃないか」

「どうやら月の生物に手土産を持っていけらしい。見てみるこのリストを。用意するのも一苦労だ」

紙面には地球上のさまざまな美味、珍味と呼ばれる高級な食材が並んでいた。木村もこれには目を丸くし、「冗談だろう？」とクルーに顔をでかくして聞いた。クルーは「そうだったらこの料理、全部食ってやるよ」とおどけてみせた。

しかし、どうやら全ては真実だったらしく、木村は翌日上司に呼ばれると、月面調査隊の一人として明日すぐにでも出発してくれとの命が下ったのだ。当然、手土産にとコンテナには大量の食料と美術品が積まれた。宇宙服を身に着けた木村はそれを横目に見て、本当に月に生物はいるんだろうな、とここにはいないマイケルに恨み言を吐いた。

月面調査船は予定通りに出発し、ほどなくして月面に到着。数年前は遠い光景だったのに、今では旅行気分だ。ありがたみのまったくない月の感触を宇宙服越しに確かめて、木村を含めて三人のクルーが月面に降りた。

するとどうだろうか。月面荒野の向こうから、ひよこひよこ何かがやってきた。

「おお、あれは兎か？」

長い耳に白い体。くりつとした丸い目は、まさに木村の言う兎そのものだ。だがしかし、その巨軀といえば、身長百八十を超える木村の腰元までくる大きさ。目の前まできてようやくその全貌を知り、木村は少しのけぞった。

「ようこそいらっしやいました。『まいける』からあなたたちのことは聞いておりました。どうぞこちらへいらっしやつてください」

どうだろうか。実にしつかりした地球の言葉を喋る。木村はクルーと一度顔を見合わせた後、とりあえず地球の土産を渡すためにコンテナを開け、食料の数々を贈呈した。

「これはご丁寧に。我々も地球を代表しておもてなしをさせていたきたい」

「ありがとうございます。月は食料に不足していて住みにくい。こんな美味なものをまた用意していただけるなんて、地球はなんていいところなのでしょう」

「どうぞどうぞ。友好的な関係を築いていただけるのなら、我々はいくらでもこんなもの用意いたしましょう」

「本当ですか？ それはありがたい。今度こちらからも取りに行かせます」

言葉だけを読み取れば、随分と喜んでくれたようだった。兎なので表情はわからない。とりあえず食材を持ちながら、木村たちは兎についていった。

それからの一日、つまりは二十四時間でわかったことだが、兎は月の鉱物を「臼と木槌」で叩いて粉々にし、食料にしていたようだ。

まさに地球で見た「兎が餅をつく」絵図そのものだった。ほかのクルーは国が違うのでピンと来なかったらしいが、少なくとも木村はその光景に感動していた。そして、その鉱物の美味なること、まさにほつぺたが落ちるとはこのことなのだろうかという味にクルー全員が腹が破裂しそうになる寸前といっても過言ではないくらいに、月兎の歓迎を喜んだのだった。

「確かに、これならいつまでも過ごしていたい気分にもなる」

木村はそう素直に感想を漏らした。クルーもそれに同感してうなずいた。

宇宙船から連絡を送り、もう少しだけ調査の時間を寄越して欲しいと、木村含むクルーが満場一致し、電報を宇宙ステーションに遣った。幸いか酸素のストックは多い。地球時間にして四日は余裕で持つだろう。木村たちはそうして一仕事終わると、再び月兎のもてなしを受けにいったのだった。

「ところで、マイケルはどこにいるんだ？」

「『まいける』なら、特別室に」

「ほう、VIPルームのようなものか。是非とも私たちもい入ってみたいものだ」

「残念ですが特別室は小さくて、あなた方の大きさなら一つ分しか入らないですよ」

「残念だ。またの機会に招待してくれるかな？」

「すぐにでも入れるようにしたいです」

「ははは、ありがとう」

そうしてまた、豪勢な食事に舌鼓を打った。

それから一週間後、宇宙ステーションのクルーはほとんどが死亡した。政府がそれを発表したとき、地球はあまりの恐怖に震え上がった。

命からがら脱出用ポッドにて帰星したクルーの一人は、事件後にかう語った。

「兎のような風貌をした奴らが急に襲ってきたんだ。それも、つい先日月面調査に向かわせた宇宙船を乗っ取ってだ。恐ろしい奴らだった。地球の言葉で「ありがとう、ありがとう」と叫びながら、俺らの仲間を次々と臼みたいなものに放り込んで、でっかい木槌で叩き潰していきやがった。思い出すだけで吐き気がしてくる……」

今日も人々は空を見上げる。月夜の頃、月面に移る兎を恨めし気に睨みながら。それをまるで知らないように、兎はぺったん、ぺったんと、臼の中の食料について、今日も生き延びている。

【B】サテライト・ガール（前書き）

この小説は【対戦カードB】の組み合わせです。
対戦相手は『百年遅れのノストラダムス』となります。

以下企画サイトのルールの項目から抜粋。
もっと詳しいルールは企画サイトか目次欄最初にある『ルール詳細』
のほうにあります。

【投票方法】……必読！

・ルールを守らない書き込みは企画ルールを知らないものとして、集計から除外します。

・投票は特設掲示板から行います。
移動は小説トップにある「投票・感想用掲示板」からお願いします。

・あらかじめ各SSタイトルのスレッドを立てておきますので、そこへ書き込みをしてください。

・投票する際は本文の最初に【投票】と書き込みを行ってください。

（もちろん投票だけでも構いませんが、感想なども作者の方
も喜ぶと思います）

・また投票はしなけど一点入れたい、
という場合はやはり冒頭に【ナシ】という書き込みを行って

ください。

（加点方法の詳細は【投票に関するルール】を参照してください）

・基本的に『小説家になろう』のサイトにある感想欄は使用いたしません。

【B】サテライト・ガール

夜空から月が消えて、もう三日が経とうとしている。

最初は世間で大いに騒がれた月消失だったけれど、困ることと言えば夜道が暗くなることくらいのもので、三日経った今は、僕は普通に大学に通う日々を送っている。

この年齢にもなると、月なんてほとんど見上げる機会がなかったし。僕が気付いた時には月の姿は既に無く、今更ネットで画像を探して、思い出すだけの存在になっていた。

おそらく僕の知らないところで、様々な論議が為されているのだろうが、平凡な一塊の学生に過ぎない自分に何が出来るわけでもない。

したがって、僕がしてやれるのは無くなった月を忍んで鍋を食べるくらいのものである。

何故鍋かって？ すみません、僕の趣味です。

「うゝ、寒いゝ。誰だ、地球温暖化唱えてる奴！」

季節はまだ、秋に入ったばかりだというのに。

月曜、時刻は午後七時。学校帰りにスーパーで材料を買い、身を縮こませながら一人暮らしの部屋に急ぐ。

空の透明度は高く、数多の星が瞬いているけども、月はやはりそこに無く、何と言うか、空虚な気持ちになった。あつ、これがセンチメンタルってやつだろうか。

何にしても、星灯りだけでは心許なく、歩く先は闇に満ちていた。だから、それを踏むまで気付かなかった。

「ふむぎゅっ」

足元から奇声がした。

「ん？」

女の子がうつ伏せにぶっ倒れていた。

「何事！？」

「うう……お腹が……」

しまった僕、腹を踏んだ!? いや、僕が踏んだのは頭だったはず。セーフセーフ!

「と、とりあえず119番! あれ、でも待てよ、最近って無闇に救急車呼んじゃいけないんだっけ!？」

迷っている、その女の子に足を掴まれる。不思議な色合いの瞳をうつうつとさせて、

「お腹が……」

「あつ、もしもし? すみません、道端に女の子が倒れているんですけども」

すぐに電話した。神速で電話した。異論がある奴は出て来るかい! ……大人しく殴られますので。

「お腹が」

「ちよ、ちよつと待って! 僕は無実だ! 誓って腹は踏んでない! 誰だ全く君みたいな美少女踏んだ奴!」

うるさいっ、頭はセーフなんだよ! ほら、ドッジボールの判定も頭はセーフだろ!?

「おーなーかがー」

「すみません踏みました! 間違いなく頭踏みました! 僕が犯人ですっ!」

「減りました……」

「どんな罰も受けるから許して下さい! そうだ踏まれましょう! 頭踏まれましょう! それでどうかお許しを……へ?」

ぐきゅるるるるう。

女の子のお腹が、大きく鳴いた。

鍋の中身が一瞬で無くなった。ちよつと冷蔵庫に飲み物を取りに行った間の出来事だった。

「え？ 僕の鍋は？」

「飲み干しました」

部屋に連れ帰った女の子は整った顔立ちの口元に葱をくっ付けたまま、そう言った。

「飲み干した！？」

鍋の下を見る。ガスコンロの火は先までと同じく、付けっぱなしになっている。

僕は思い出す。鍋は湯氣を立てて煮えたぎっていた。ぐつぐつ。

……。

……。

……… 中身は最初から入ってなかったことにしよう。

「で、とりあえずお腹一杯になってもらったところで本題だけど」「はい」

思考放棄して、僕は女の子の向かいに正座する。

「何であんなところに倒れてたの？ 行き倒れてわけじゃないよね？」

「行き倒れです」

嘘付け。僕はこんなに綺麗な女の子が行き倒れているのを見たことがない。

女の子の髪は白銀で、部屋の安っぽい蛍光灯の明かりを受けてさえ、きらきらと宝石のように輝いている。肌も白く、くびれる所はくびれ、出るところは出ている。どこかのお嬢様か何かなのだろう、多分。行き倒れにしてはスベックがあまりにも高過ぎる。

「私は、宇宙から家出して来たんです」

なるほど、家出か。やはりお嬢様となると、親から色々と拘束を受けるんだろう。そうか、へえ……… くん？

「ごめん、よく聞き取れなかった。どこから家出して来たって？」

「宇宙です」

女の子は安っぽい蛍光灯を指差し、

「私は、お月様ですから」

「え〜つと、1、1、0、と。……あつ、警察ですか？ 今ですね、僕の家に電波なこと呟く不審な女の子が」

「困ります」

女の子は僕の携帯電話を奪うと、ぐわしゃあ！ と握り潰し、粉砕してみせた。

「ちなみに私の握力は、地球重力の約六分の一です」

「そっかあ、君はお月様なんだあ。うん、僕は微塵も疑ってないよ？」

宣言しよう。僕は拳銃を突きつけられたら犯人側に寝返るタイプだということ。

「で、私が宇宙から家出をしてきた理由なのですが、最近、自身の存在価値に疑問を持つようになったからなんです」

「はあ、存在価値」

「太陽があるじゃないですか」

「ありますね」

「私はあいつが大嫌いなんです」

あれ、話の主導権がいつまにか逆転してね？ とか思うのだが、地球重力の六分の一に反論出来る奴がいたら、是非出て来て欲しい喜んで変わってあげよう。

「恒星っていいですね。自分から光放って、自己主張出来て。それに比べて私は、太陽の光の反射役に過ぎませんし。しかも惑星じゃないくて、衛星だし。この間ね、神様をお願いしたんですよ。そろそろ私も惑星に昇格させてもらえませんかね、つて。そしたら、あのクソジジイ、何て言ったと思います？ お前が惑星になってどうする気だ、地表面でウサギでも飼う気か、ですよ？ そりゃあ家出もしたくなるってもんですよ。それからですね——」

膝を抱えてぶつぶつと愚痴を吐き出し続ける女の子。

あれれ、おかしいな。僕が最初に彼女に抱いたイメージが、どんどん崩れて行くんだけど。

それから一時間、二時間と愚痴は続くわけだが、その頃には僕の

額から嫌な汗が出始めていた。

「ちよつと、あなた、聞いてます？」

「聞いてます聞いてます！」

この状況はマズい、と全身が訴えていた。何がマズいのかと言えば、いつの間にか女の子が横にいて、指を絡めて来ていることである。

どうやら女の子は電波系の上にヤンデレであるらしかった。

後から振り返ると、この時の僕は相当に混乱していたんだと思う。状況を打破する為に必死だったのだ。

「……確かに、僕は今まで月を意識したことはなかった。だけどやつぱり——」

言っておくが、断じて彼女の話を信じたわけではない。

「夜空に月がないと、寂しいよ」

全力で逃げただけだ。

ひよつとしたら、彼女は本当に月であつたのかもしれない。

何故ならば、あの逃げ台詞を言った翌日に、夜空に月が戻って来たからだ。

女の子は「仕方がないので、あなたの彼女になってあげます。もしもあなたが浮気するようなことがあれば、地球に激突して私も碎け散ります」と大災害予告を残して去って行った。要するにあなたを殺して私も死ぬ的なアレである。夜道では本気で背後に気を付けようと思う。

しかし、数日後に僕の生死どころか人類の生死に関わる問題が起ることとなった。

今度は太陽が空から消えてしまったのだ。

騒ぎはもちろん月の比ではなく、世間では地球の終わりだとか囁かれている。

で、そんな中、今日も僕は鍋の材料が入ったビニール袋片手に、家へ向かっている。

月の時みたいに今回も何とかなるさ、というようなポジティブシンキングではなく、死ぬ前に腹一杯好物を食べておこうというネガティブシンキング故である。

そして、僕は道端で一人の女の子に出会うわけで。

「よう、少年」

真っ暗闇に閉ざされた街だというのに、燃えるような赤髪の彼女は、眩いばかりの笑顔をこちらに向けて。

「月が惚れたってのは、あんたかい？」

どうやら地球の命運は、僕の手懸かっているらしかった。

【B】百年遅れのノストラダムス（前書き）

この小説は【対戦カードB】の組み合わせです。
対戦相手は『サテライト・ガール』となります。

以下企画サイトのルールの項目から抜粋。
もっと詳しいルールは企画サイトか目次欄最初にある『ルール詳細』
のほうにあります。

【投票方法】……必読！

・ルールを守らない書き込みは企画ルールを知らないものとして、集計から除外します。

・投票は特設掲示板から行います。
移動は小説トップにある「投票・感想用掲示板」からお願いします。

・あらかじめ各SSタイトルのスレッドを立てておきますので、そこへ書き込みをしてください。

・投票する際は本文の最初に【投票】と書き込みを行ってください。

（もちろん投票だけでも構いませんが、感想なども作者の方
も喜ぶと思います）

・また投票はしなけど一点入れたい、
という場合はやはり冒頭に【ナシ】という書き込みを行って

ください。

（加点方法の詳細は【投票に関するルール】を参照してください）

・基本的に『小説家になろう』のサイトにある感想欄は使用いたしません。

【B】百年遅れのノストラダムス

二〇九八年 五月十日

衛星軌道を外れた月が、地球に衝突する。

今、世界中のメディアがそのニュースで持ちきりである。いわく、今からちょうど百年前に世を騒がせたノストラダムスという預言者の言葉が、一世紀遅れで現実のものとなったのだという。

衝突時刻はおおよそ一年後。そのときが地球最後の日になるだろう。

だが、その事実を知ったとき、私の胸に去来した感情は恐怖でもなければ絶望でもなかった。

私には幼少時より培い続けてきた知識があり、そして亡き両親が残した莫大な遺産があった。体の芯から燃え上がるような使命感を覚えた。簡単な道程でないことは承知の上だ。しかし、私にしかできないことがあるのなら、なんとしても成し遂げたい。

久々に筆を取った。これからも時折、手記をつけていこうと思う。

二〇九八年 五月三十日

月を破壊する。

熟慮の末、それが辿り着いた結論だった。

だが、いかにせん。国軍に進言してみたが、所詮は一介の市民に過ぎぬ私の言葉である。ろくに取り合われもせず終わってしまった。

だからと言って状況を傍観してられるわけもない。相手にされないというのならそれも構わぬ。誰も成さぬなら私が成そう。

私は月を破壊するためのミサイル開発に着手し始めた。兵器工学の知識はあるが、机上を越えて実際に製作段階に移るのは初めての

ことだ。進捗状況はあまり芳しくない。だが、今は我慢の時だ。絶対に失敗できない仕事をこなすとき、必要なのは迅速な行動ではなく綿密な計画。ただのひとつも計算を間違えてはならない。私はひたすら慎重に、根気強く作業を押し進めていった。

二〇九八年 八月一日

一人では作業をまかないきれなくなってきた私は、かつての学友に片端から声をかけた。彼らのほとんどは呼びかけに快く応えてくれた。

良き友人に恵まれたことを心から感謝した。

二〇九八年 十一月二十二日

地下室にこもりきりの日々が続く。もう何日も太陽の光を浴びていない気がする。だが、時間は一秒たりとも無駄にできない。こうしている今もタイムリミットは刻一刻と差し迫っているのだから。

友人たちは交代で家に帰している。彼らにも愛すべき家族がいるのだ。

二〇九八年 十二月二十五日

長いこと顔を見ていなかった弟が地下室に訪れた。弟はすっかり変わり果ててしまっていた。このような状況下に置かれた今、それこそが人間として正しい反応であった。私に向かって心無い言葉を投げかけてくる弟を前に、嘆かわしさは覚えても憤怒の情など抱けるはずがない。

かつての弟の笑顔を取り戻すためにも、私はやり抜かねばならぬ。終わりの見えぬ戦いの中で心が折れかけていた私にとって、弟の来訪はよき動力源となってくれた。

二〇九九年 一月八日

カレンダーなど手記をつける際にしか見ない。気が付けば年が明けていた。

何もかもを投げ打って作業に明け暮れていた日々がようやく形を作りつつあった。現場の士気も否応となく上昇する。ここまで漕ぎ付ければ、残りはただ間に合わせるだけだ。

あと四ヶ月。

二〇九九年 三月十二日

また弟がやってきた。彼は前回に比べればいささかばかり落ち着いた様子で、この日はほとんど罵詈雑言を口にするともなかった。

弟は何も言わず、私の作業をじっと眺めていた。弟が何を考えているのかはわからなかったが、私のすることに興味を持ってくれたことは嬉しかった。

世界を救おうなどという大義名分はとうに捨て置いていた。私は英雄になりたいのではない。今ではただ唯一の肉親となった弟を救うためだけに、粉骨碎身の日々に身を投げ込んでいるのだ。

もう少しだけ待っていてほしい。そうすれば私たちはあの頃のようになんか笑い合えるはずだ。

二〇九九年 四月九日

時間がない。

二〇九九年 四月二十三日

もう一週間は寝ていない。あと一息だ。

二〇九九年 四月三十日

間に合った。この安堵感、達成感をどう言葉にすればよいものか。

やるべきことはすべて済んだ。あとはスイッチひとつで月を破壊するためのミサイルが打ち上げられる。

友人は全員家へ帰らせた。彼らはこれまでよく頑張ってくれた。精一杯のねぎらいの言葉と心ばかりの謝礼を、皆が快く受け取ってくれた。

この一年間ほとんど喧騒の絶えなかった地下室が、今では嘘のようにしんと静まり返っていた。その静寂こそが、私たちが成し遂げた形ある未来の平穏だ。

ミサイルを打ち上げる前に、私は久方ぶりに地下室から外へ出た。弟に会いに行ったのだ。驚いた顔で私を迎える弟に、私はその場では多くを語らず、次に会うときは一杯やろうとだけ約束を取り交わして辞去した。弟は始終呆氣に取られたような表情をしていて、少し笑えた。

奇しくも月の綺麗な夜であった。煌々と放たれる静かな輝きは、私の意志に屈した月なりの皮肉だったのかもしれない。

（ある女性の手記・三十二ページから四十ページより引用）

/

二〇九九年 四月三十日

昨年に両親が亡くなって以来、姉はおかしくなってしまった。理

由は遺産だったのか、それとも別の何かだったのか、俺にはわからない。

それから姉にはいつさいの言葉が届かなくなった。姉はきっと、俺とは違う世界を見るようになってしまったのだ。俺の目には白く映るものでも、姉にとっては黒に見えるようになってしまったのだろう。

電源の点いていないテレビを前に、ノストラダムスなどという歴史の教科書でしか聞かない人物の名前を呟いていた姉を見た瞬間、俺の中で何かが終わった。それから俺が姉に見切りをつけるのに大した時間はかからなかった。

それでも血を分けた姉弟だ。別居してから何度か様子を見に行ったが、いつ行っても姉はわけのわからない連中と一緒にわけのわからない研究に没頭していた。周囲の連中の全員が姉に媚を売るような態度だったのが気になった。

その場でしばらく様子を窺ってみると、理由はすぐにわかった。姉は彼らに破格の「謝礼」を手渡していたようだった。日ごとに数十万円ほどだろうか。両親の残した財産をそんな風に使っている姉に、俺は心底から悲しみを覚えた。

そんな姉が昨日、家にやってきた。これまで何度言ってもあの妙な研究を止めず、地下室から出ようともしなかった姉に、いったいどんな心境の変化があったというのだろう。

姉は始終機嫌よく話し、俺に向かって酒の約束まで取り付けてきた。だが、そのときに姉が見せた笑顔は昔のものとは何ら遜色のないものだった気がした。俺もなんだか嬉しくなってしまうて、そのときはつい首を縦に振ってしまった。

今日ならば聞けるのではないかと思い、別れ際に意を決して訊ねてみた。姉貴はいつたいあの地下室で何をしているのかと。

これまで地下室のことについて何を言っても激昂するばかりだった姉は、清々しい笑顔を浮かべて答えた。

「もう大丈夫だ。私たちはきつとまた笑い合えるようになる」

そう言って、姉はおもむろに空を仰いだ。その日はとてもいい天気で、雲ひとつない青空が抜けるように広がっていた。姉は目を細めながら、挑むような表情で、燦々と照りつける太陽をじっと眺めていた。

（ある男性の手記・八十五ページより引用）

/

西暦二〇九九年五月一日。

地球はその日を境に氷河の星となり、滅亡した。

【C】二人で月に（前書き）

この小説は【対戦カードC】の組み合わせです。
対戦相手は『愚者とウサ耳』となります。

以下企画サイトのルールの項目から抜粋。
もっと詳しいルールは企画サイトか目次欄最初にある『ルール詳細』
のほうにあります。

【投票方法】……必読！

・ルールを守らない書き込みは企画ルールを知らないものとして、集計から除外します。

・投票は特設掲示板から行います。
移動は小説トップにある「投票・感想用掲示板」からお願いします。

・あらかじめ各SSタイトルのスレッドを立てておきますので、そこへ書き込みをしてください。

・投票する際は本文の最初に【投票】と書き込みを行ってください。

（もちろん投票だけでも構いませんが、感想なども作者の方
も喜ぶと思います）

・また投票はしなけど一点入れたい、
という場合はやはり冒頭に【ナシ】という書き込みを行って

ください。

（加点方法の詳細は【投票に関するルール】を参照してください）

・基本的に『小説家になろう』のサイトにある感想欄は使用いたしません。

【C】二人で月に

月が綺麗な夜のこと。

どうやら今夜は満月らしい。私はぼんやりと寝起きみたいな頭で思った。

私が立っていたのは昔幼馴染の男の子と二人でよく遊んだ場所だった。そこは小学校の裏にある山を少し登った所にある崖の上で、私達は秘密基地と呼んで頻繁に足を運んでいた。それも最近では別れ谷という名で呼ばれる曰くつきの場所だけれど。時間とは無情にも流れ、世の中を変えて行くのだった。

最後に二人でここに来たのは、今から数えて丁度六年前。小学校六年の時。

私はまた、こうして懐かしい思い出が染み付いた場所にいた。

がさがさと音がして、やがて暗くなった木々の奥から人影が姿を現す。短い髪の青年。月光に照らされて露になった青年は、見間違えることなく幼馴染のカンヤだった。

「よお」

危ないんだから、こんな時間にこなくてもよかっただろのに。

カンヤは愛想のいい笑顔に僅かな憂いを交えて、

「明日にしようかと思ったけどさ、まあ、なんつうか今日じゃないとダメな気がしてさ」

なんて口にする。

家が近かったために小学校入学後もよく遊んでいた幼馴染は、しかし十二歳ともなれば一人の男の子として意識してしまう。……というより、もっと早くから、か。私がカンヤを意識していたのは、変に気にして素直に話せなかったことも多々あった。

歯痒い気もしていたけれど、それだって年齢のせいにして結局――今に至る。

「ほら、あの日も満月だっただろ？ バイト終わってから気付いた

んだけどな。あーこりや無視できねえわ、とか思ってた。なんか、おまえに呼ばれてる感じがして」

月を見上げつつ、こめかみの辺りを指で掻く仕草。カンヤの癖は今なお健在らしい。

「てか、俺って昔っからおまえのわがままに付き合ってたよな。覚えてるか？ おまえの小学校の時のあだ名」

私はカンヤの質問に思案する。

あだ名。ニツクネーム。さて、なんだったか。自分のことながら覚えていない。記憶全体に霧が掛かってるみたいで、はっきりと思えない。うーん、と唸りながら考えてみるけど、やっぱり答えは出そうに無かった。

……なんだか、悔しい。

「わがままかぐや姫。あれ？ はじめに言ったのって誰だっけ。……まあ、いいや」

ああ、言われて思い出した。確かそんな風にかかれていたこともあった気がする。

名付けの親は幼稚園の若い先生で、由来は私の名字が竹内だったことと思う。当時かぐや姫の童話を読み聞かせてくれた先生が「環姫ちゃんみんなに優しくされてお姫様みたいだね」なんて言った後「名字も竹内だし、竹の内のお姫様、かぐや姫だっ」と言ったことで誕生したニツクネームで、それが小学校に上がってから、あらぬ尾びれ——この場合は尾じゃないけど——を付けたのだ。犯人は言うまでもなくバカカンヤだけど。

「姫って柄じゃなかったけどな、おまえ」

うつさい。散々からかつといて今更よ。

むう、と頬を膨らませてみる。もちろん、カンヤは気にも留めないけど。

カンヤは自分で言ったことがツボに入っただのか、堪えていた笑いを吹き出した。ははは、なんて押し殺した風な笑い声を漏らすこと数秒。呼吸を整えたカンヤが目尻に滲んだ涙を指で拭いて、

「はは……今から思ったら、それも皮肉だけだな」

皮肉ときたか。間違っではないと思うけど。

だって、かぐや姫なんてびっくりするぐらい良く出来たニツクネームだ。私、月好きだし。年甲斐も無く……とはいっても十二歳の子供か。六年生になってからでも月を見るたび心が躍ったのは恥ずかしいから私の胸の中だけの秘密。

でも、あれ。かぐや姫は月を見て毎晩泣いていたんじゃないかっただろうか。

大好きなおじいさんとおばあさんと別れるのが辛くて。

「あー……男で姫ってのはないわな」

……？

意味不明な言動に私は首を傾げる。

それから少しして、カンヤの言ってることが分かって目を見開いた。

ちよつと、なに言ってるのよこいつは！

首をぶんぶん左右に振って、熱くなる頬を冷まそうと無駄な試みに出る。上手く行きやしないけど。

あはは、という乾いた笑い声。カンヤが上を向いて笑っていた。無理矢理捻り出したみたいな笑い声を聞きながら、私も動揺していた心中を落着ける。

「六年も……経ったんだな」

そうして、収まった笑い声と一緒に緩んだ表情を引っ込め、カンヤが呟く。

「ほんとう、子供だったよな俺達。毎日泥だらけになって遊んで。おまえなんて、一応女の子だった癖に」

一応、とか言うなバカ。

「何でもないことが楽しくてさ。なにが面白いんだ、って今から思ったら毎日が本当にバカバカしい」

カンヤは大人びた苦笑を見せる。

思い出は時と共に色褪せていく。あの日の笑顔、涙、憤り、想い、

夢。万物はいつまでも同じ場所に留まることなく、巡る季節のように変わり続ける。いつか唯一だった一瞬も夢の一部みたいに曖昧で、現実味のないものになるけれど――。

それでも、かけがえのない一瞬だと私は思う。

こうして残留する思いが、私にはあるから。

六年間、彼を待ち続けるだけの深い深い想いがあるから。

「じゃあな、俺、そろそろ帰るから」

現れた時と同じ方の手を上げて――カンヤは、逆手に持った花束を私の足元に置いた。

「言えなかったけどさ、俺、おまえのこと好きだから。だから――
そっちでも元気でいろよ」

かさり。花束が地面に触れて揺れる音。墓石として置かれた石の前。

一人の少女の話。

月に憑かれた少女の話。

あの日、いつも通り暗くなるまで遊んでいた。笑い声高く、高揚を少しも抑えず。はしゃぎ続けた。

遊び疲れて秘密基地に戻って来た私達を待っていたのは、今日と同じ金色の満月。

それがあまりに綺麗だったから、手を伸ばした。届かないと知っていたけど。暗い足元を確認もせずに一歩ずつ前へ。もっと近くで見たくて。そして。

六年前の今日――かぐや姫と呼ばれた少女は、月へと帰った。

「私も好きだよ、カンヤ」

「え？」

びくり、とカンヤの肩が跳ねる。家路を辿る脚が停止して、短い髪を揺らして彼は振り返った。

半身で振り返ったカンヤに近づき、私は彼の手を握った。

私達の秘密基地。

別れ谷と呼ばれる曰くつきのスポット。

六年前から月を見に訪れたカップルの内、彼女だけが足を滑らせて転落死する事故が多発している場所。

月が綺麗な夜のこと。

十二歳で時間の止まったかぐや姫は、今宵、大好きな男の子と手を繋いで月に帰った。

／了

【C】愚者とウサ耳（前書き）

この小説は【対戦カードC】の組み合わせです。
対戦相手は『二人で月に』となります。

以下企画サイトのルールの項目から抜粋。
もっと詳しいルールは企画サイトか目次欄最初にある『ルール詳細』
のほうにあります。

【投票方法】……必読！

・ルールを守らない書き込みは企画ルールを知らないものとして、集計から除外します。

・投票は特設掲示板から行います。
移動は小説トップにある「投票・感想用掲示板」からお願いします。

・あらかじめ各SSタイトルのスレッドを立てておきますので、そこへ書き込みをしてください。

・投票する際は本文の最初に【投票】と書き込みを行ってください。

（もちろん投票だけでも構いませんが、感想なども作者の方
も喜ぶと思います）

・また投票はしなけど一点入れたい、
という場合はやはり冒頭に【ナシ】という書き込みを行って

ください。

（加点方法の詳細は【投票に関するルール】を参照してください）

・基本的に『小説家になろう』のサイトにある感想欄は使用いたしません。

【C】愚者とウサ耳

月からの使者を名乗るウサギが、僕の目の前に現れた。

二本足で立ち、英国紳士のような黒スーツにステッキ。外国の童話に出てきそうなキャラクター見たいだった。

「こんにちは。私は、あなた達地球人と友好関係を結びたく思い、やってまいりました」

そんな人——ウサギが、何でアパートで一人暮らしをしている学生である僕の所に来るのか分からない。

「しかし我々も、地球人が本当に信頼におけるかどうかは未だに意見の分かれる所でして。そこで、地球人から一名を選び、その者次第で判断を行うという結論に至りました」

要するに僕は、この月のウサギたちのモニターに選ばれた訳だ。

「それで僕はどうすればいいんですか？」

「一ヶ月、あなたの日常生活を観察させて頂きますのと」

ウサギは、おもむろに箱を一つ取り出した。僕は慎重に箱を開ける。

「これを身につけて頂きます」

サッと、顔が青くなつたのを自覚した。

そこ入っていたのは、ウサギの耳の被り物だった。

「いや、あの。これをずっと……？」

「その通りです」

「人前でも？」

「ええ。不可抗力で外さざるを得ない場合を除いて」

これをつけて人前を歩く。想像しただけでゾツとした。

「これを外したら？」

「あなた達地球人を敵性民族としてみなさせていただきます。最悪、我々と戦争、ということになるかも知れません」

「戦争……」

「我々ならば、地球全土を掌握するのに一年もかからないでしょう」
僕は絶望的な気分で天を仰いだのだった。

——クソ、何で僕なんだよ！

何度もそう思いながら、僕は電車に乗っていた。

顔も良くない男がウサ耳を着けるといふ、悪趣味なアンバランス。こんな、最悪に決まっている！

電車に乗った時に一瞥してくる視線。

時折こちらを見る視線。

その裏には、僕に対する好奇が潜んでるに決まっていた！

その後大学についても、僕はそういう視線に射抜かれているに決まっていた！

そして昼休み。僕は学生ホールに向かう。人目につきたくはないが、一人でいるのも嫌なので。

「よう、山田」

ホールの椅子に座りながら、友人は僕に手を振ってきた。

「あ、ああ」

「ん、お前それ、どうした？」

案の定飛んで来る、ウサ耳への疑問。ああ、止めてくれよ本当……。

「ん、ああ……ちょっとね」

下手にも程があるごまかし。

それでも友人は、

「似合わねえな、それ」

の一言で、興味をなくしたようだった。

そんな生活を初めて一週間。相変わらず、ウサ耳を付けて人前を歩く日々が続く。夜空の月を見るたびに、あのウサギを憎たらしく思った。

そんなある日のサークルの時間。特に活動することもなく、部室

で駄弁っていた。

僕は一人黙ってぼうつとしている。

ここにいて楽しい訳じゃない。ただ、露骨に孤立するのが嫌なだけ。

僕は、昔から自分を出すのが苦手だった。自分なんかでしゃばると、軽蔑されるに決まっただけ。

だから僕は今まで、目立たないようにを暮らしてきた。

「なあ山田、今日のそれどうしたの？」

にも関わらず、この仕打ち。

気分の悪くなった僕は、トイレに行く名目で席を立った。トイレの洗面所で眼を閉じながら顔を洗い、荒れた息を整えた僕。

「僕が、何をしたって言うんだよ……！」

気分が落ち着けば落ち着くほど、言いようのない怒りが僕の胸に満ちる。

僕はとうとう衝動に耐えられなくなって、拳を振りかぶって鏡を

「おう、何やってんだ」

割る直前で人が入ってきた。同じ写真部の、田中だった。ビックリした僕は慌てて、

「な、何も！」

と顔を真っ赤にしながら否定した。

そんな僕を田中は特に興味もなさそうに、

「いや、別に良いけどさ」

そう言っ僕を横切って、彼は鼻歌交じりに用を足し始めた。その時、ふと田中がこちらを見て、じいっと一瞥しているように思った。

「……はつきり言ったらどうなんだよ？」

僕はとうとう堪えられなくなって、田中に荒げた声をかけた。

「何を？」

「どうせお前だっておかしいんだろ、この僕が着けてるウサ耳が！」

「は？ 何言ってるんのお前？」

僕の方が何を言ってるの、だった。

「いや、だから！ 今僕が……！」

「カチューシャだろ？」

「いや、だってこれ、ウサギの耳が……」

「は？ ついてねえよ？ お前頭大丈夫？」

僕は、信じられない思いで鏡を見る。

そこには、ごく普通のカチューシャを着けた僕がいた。

「そんな、何で？ だって、例えばさっき写真部の皆もこれの……！」

「まあ、お前とカチューシャっつーのもちよつと変だしな。つけ方違ってるし」

「え？」

「いや、カチューシャをそのまま頭にはめるなよ。帽子じゃねんだから。ほれ……」

田中は、当たり前前の方法でカチューシャを僕の頭につけた。

つまりこのウサ耳は——最初から僕以外の人間には見えていなかったのだ。

言われて見れば、色々と変だった。

そもそも、皆が僕を見る視線なんて、気持ち次第でどうとでも解釈出来る。

大体……幾らなんでも、誰もこのことをはっきり突っ込まないなんてありえない。講義やバイト中、一度も外せと言われないなんて僕はがっくりと肩を落とした。

「……でも、やっぱ変だよな。僕が、こんなの着けるなんて」

「ま、別に良いんじゃない？」

そう言って、田中は苦笑いを浮かべた。

「お前が頭に何を着けてようが生やしてようが、そんなにお前何て

「見ねえって」

「成功のようです」

月の国の会議室。モニターで一部始終を見ていた使者のウサギが言う。

「うむ。どうやら被験者は、我々の耳を人類が見ても迫害を行わないと判断したようだ」

「ええ。今こうして耳が見えるようになった以上は、もう大丈夫でしょう」

「そうだな」

「何故ならあれは——被験者が大丈夫だと判断した場合のみ、周囲に耳が見えるようになるのですから」

「あ、あの……一つ良いですか？」

その時、気の弱そうな一羽のウサギが拳手をした。そして、使者の顔を伺うようにしながら、彼は申し訳なさそうにこう言った。
「思っんですけど……その、我々が耳を生やしているのと、人間が我々の耳を象った物を被るというのは、勝手が違うかと……」

一人トイレに残り、馬鹿馬鹿しくなった僕は大声で笑う。

何だ、そういうことじゃないか。僕のことなんて、誰も見てやしなかったじゃないか。だって、そもそも僕は今まで何もしてこなかったんだから！

それなのに今まで僕は、。。。に決まっているとか思い込んで。そんなことだから、僕は今まで独りだったんじゃないか！

そうだ。仮に僕の頭にウサ耳が付いてたからって何だ。それで僕と言う人間は決まらないんだ！

ふと、もう一度鏡を見てみると、そこには、最初に僕が見たウサ耳が僕の頭に生えていた。

どういうことかとしばらく考えて、僕は一つの答えに至った。
要するにこれは、僕がこの耳が見えても構わないと思った場合に

のみ、僕以外の眼にも映るようになるんだ。しかし、今の僕にウサ耳なんて関係ない！

——よし、部屋に戻るぞ！ 生まれ変わった僕として！
こうして僕は意気揚々と部屋に戻り……。

「山田君、どうしたの……？」

僕の頭上を指差してポカンとするサークル員一同が出迎えた。

うん、知ってた。現実がそんなに甘くはないってこと位。

一度はつきりと現れてしまったウサ耳は消えることなく、奇異な視線に晒され続けた僕は、皆からヘタレウサ耳と呼ばれるようになりましたとさ。

いや、それでも遅しく生きてるんだけどさ。

【D】白色の檻（前書き）

この小説は【対戦カードD】の組み合わせです。
対戦相手は『月に携帯を掲げて』となります。

以下企画サイトのルールの項目から抜粋。
もっと詳しいルールは企画サイトか目次欄最初にある『ルール詳細』
のほうにあります。

【投票方法】……必読！

・ルールを守らない書き込みは企画ルールを知らないものとして、集計から除外します。

・投票は特設掲示板から行います。
移動は小説トップにある「投票・感想用掲示板」からお願いします。

・あらかじめ各SSタイトルのスレッドを立てておきますので、そこへ書き込みをしてください。

・投票する際は本文の最初に【投票】と書き込みを行ってください。

（もちろん投票だけでも構いませんが、感想なども作者の方
も喜ぶと思います）

・また投票はしなけど一点入れたい、
という場合はやはり冒頭に【ナシ】という書き込みを行って

ください。

（加点方法の詳細は【投票に関するルール】を参照してください）

・基本的に『小説家になろう』のサイトにある感想欄は使用いたしません。

【D】白色の檻

「白色の檻だ」

どこか遠くを見つめる瞳で貴方は言った。

「捕らわれの兎、ヨーロッパでは読書する女だっただろうか。とにかく、彼らは檻から出ることが出来ない。助けを求めようにも、人の手が届くには余りにも遠すぎる。まさに孤立無援。見られるだけの、なんと悲しいことか」

寂しげな光が、訴えかけるように私を包む。だが、その今にも消え入りそうな光は、貴方の力では到底成し得ない事象。天道の輝きを拝借してやっと叶う、そんな光華。寂しさと虚しさが辺りには漂っていた。

だから、私は貴方を見据えたまま言った。

「貴方が言っているそれらは全て人間の空想の賜物だ。実在はしない。貴方もそれには気付いているのだろう？ それでも貴方が彼らに思いを寄せ、その悲哀を分かち合おうとするのは、誰が為の物ではなく、結局は自身の苦悩に他ならない。そうなのだろう？」

それは無論、貴方に自身の心を認めさせる為の行為でもあったが、その反面、私自身が内に秘めたもどかしさを払拭する為の行為でもあった。顔を背け、唇を噛み締め、私は今だけ、貴方と相容れられぬ立場にあることを恨んだ。

「……………」

結果訪れた沈黙は、当然のように場の空気を重くした。一陣の風が吹き、連られて流れて来た浮遊する白綿が、悪びれた様子もなく貴方を覆い隠したのも、何か由縁があるに相違ない。貴方が私に届けようとする光はより淡く弱々しいものと化した。

悠久とも感じられた寂寞を先に割ったのは、貴方だった。

「そう、確かにその通りだ。私は常に孤独であることを悲しみ、またその悲哀を認めたくないが故に、私の立場を空想の兎や女たちに

転換してただけだ。だがその何が悪い。認めたところでどうにかなるわけではない孤独感から、逃れたいと思うことの何が悪い！」

再び吹いた風が光の遮蔽物を取り除き、輝きは強まる。

「持ちつ持たれつの精神で成り立ってきた社会に甘んじている、貴様らのような人間どもには理解できないだろう。生まれし頃より隣人に当る者はおらず、それはおろか家族に当る者すらいない浮世など想像がつくわけがない。他との諍いもなく、悠々閑々と生活できる隠居などを想像してもらっては困る。孤独とはそういうものではない。どんなに明細に説いても貴様らには伝わるまい。こちらを指差してへらへらと論う未熟者どもめが！」

言い切った貴方は私を直視。先ほどまでの寂しげな光は影を潜め、今私に届いているのは激昂に染まった光だった。

だが、この時私は気付いた。その証拠として私は今、貴方の視線に對峙する。貴方は勘違いをしているだけなのだ。根本からの、大きな勘違いを。

その時、東雲しのめの空が顔を覗かせ始めた。

「ははっ、遂に存在までもが否定される時が来たようだ。見られることすらない、孤独すらも超越した時間が。だがもしかしたらそちらの方が気が楽なのかもしれない。孤独を打ち明ける相手がいるからこそ、孤独を強く感じるのかもしれないのだから。さらば人よ。

貴様は精々仲間のいる世界を楽しんでいるといい」

貴方の姿は西の空に沈みかけている。だが、そのまま行かせるわけにはいかない。私は貴方に伝えなければならぬのだ。

「捻くれや開き直りもいいところだ。第一、貴方は初めから一人ではない。貴方に光を貸し与えていた太陽、貴方の傍にずっと居続けている地球、さらにはその空気や雲や水や動物、全て貴方に関わっていたではないか。物の見方を変えるべきだ。そうすれば貴方は孤独など、唯の思い過ごしであるということに気付くはずなのだ」

私は言葉を空に投げた。だが空は既に曙光が支配しており、吸い込まれるようにして消えていった言葉は、遂に貴方に届くことはな

かつた。

月は、既に見えなくなっていた。

【D】月に携帯を掲げて（前書き）

この小説は【対戦カードD】の組み合わせです。
対戦相手は『白色の檻』となります。

以下企画サイトのルールの項目から抜粋。
もっと詳しいルールは企画サイトか目次欄最初にある『ルール詳細』
のほうにあります。

【投票方法】……必読！

・ルールを守らない書き込みは企画ルールを知らないものとして、集計から除外します。

・投票は特設掲示板から行います。
移動は小説トップにある「投票・感想用掲示板」からお願いします。

・あらかじめ各SSタイトルのスレッドを立てておきますので、そこへ書き込みをしてください。

・投票する際は本文の最初に【投票】と書き込みを行ってください。

（もちろん投票だけでも構いませんが、感想なども作者の方
も喜ぶと思います）

・また投票はしなけど一点入れたい、
という場合はやはり冒頭に【ナシ】という書き込みを行って

ください。

（加点方法の詳細は【投票に関するルール】を参照してください）

・基本的に『小説家になろう』のサイトにある感想欄は使用いたしません。

【D】月に携帯を掲げて

夜、携帯を夜空に掲げると、電波を受信した携帯が震えた。

『お嬢様。明日の晩、こちらから迎えを送りますので、出立の準備のほどをお願いいたします』

堅苦しい文面を見て、私は思わず笑いが漏れた。

毎日だと煩わしく思うこともあるが、久しく会っていないとなれば少しだけくすぐったい。他にも長らく会っていない面々を思えば、旅立ちを決して憂鬱なものではなかった。

もうこの地に思い残すことはなにもない。初めて見た海も、驚くほど深い緑も、そして初めての同級生も。たくさんの初めてと喜びを私は心に刻んだ。ただ、唯一の心残りと言えばそのクラスメイトたちとは最後まで仲良くなれなかったことだろうか。

明日の晩、私は生まれ故郷へ帰る。元々帰る時期は決まっていたが、具体的な日を決定したのは私自身だ。もう担任を通して学校にも伝えてある。あとは明日の迎えを待っただけだ。思い残すことはなにもないはずだ。

寮の窓辺から月を見上げながら、私はこちらへやってきてからの一年をとつとつと思いだしていた。

そんな時、夜空へ掲げていない私の携帯が震えた。

『明日の晩、時間取れるかな？』

差出人はミヤコ。私の隣の席に座るクラスメイトの名前だった。

携帯のメールアドレスを交換するほど深い仲でもなかった彼女が、今日になって突然聞いてきたのはこの連絡をするためだったのだろう。私は『遅くならなければ大丈夫ですよ』と簡素に一文だけを打ち込むと、送信ボタンを押した。

掲げなくてもいい携帯を、私は癖で夜空へ掲げていた。

翌日。

メールでの指示通り、私は夜七時を数えて学校の屋上への扉を開いた。

そこには、

「お、主賓が来たぞー」

「ちょっと！ 男子つまみ食いしないで！」

「あー、待ってたよー。こっちこっちー」

総勢三十名以上の男女――私のクラスメイトたちだ――が、いざの上に料理を並べている光景が広がっていた。

「えっと……？」

どういう光景を予想していたわけではないが、それでもあまりに想定外の光景に私の思考は停止した。

私が戸惑っていると、ミヤコさんが私の元へやって来た。

「ごめんね、ホントはみんなで出迎えるつもりだったんだけど。知っての通りまとまりのないクラスでさ」

クラスのリーダー格で姉御肌のミヤコさんは、これまでも今一クラスになじめない私を気遣ってたびたびこうして話しかけてくれた。でも、これはいったい何事なのだろうか。

「ほら、みんな！ とりあえず集合！」

ミヤコさんがパンパンと手を叩くと、騒いでいた男子もお喋りをしていた女子もぞろぞろと集まってきた。

しばらくすると私の前にはクラスメイトが勢ぞろいした。

「説明遅れちゃったね。今日はお別れ会兼お月見大会ということで、学校の屋上を借りちゃいました！」

お月見。そう言えば、今日はちょうど十月三日。今年の十五夜だ。今日が満月なのは知っていたが、そんな風習のことなどすっかり忘れていた。

しかし、そんなことよりも、

「お別れ、会？」

「うん、そう」

ミヤコさんは軽く頷いた。

「私の？」

ミヤコさんは満面の笑みで頷いた。

なんだろう、目の前にある事実が驚くべきことだというのは分かるのだが、頭がびっくりしすぎて全然現実感がない。お別れ会。お別れ会。えーっと、お別れ会ってなんだっけ？ 仲の良い人同士がお別れをする時に、相手を惜しんで送り出す時に催してくれる会、のことだろうか。したこともされたこともないけれど。

そんなことをぐるぐると考えていると、ミヤコさんが私の背中を押してみんなの中心へ立たせた。みんなは用意していた紙コップを手にとった。私の手にも紙コップが渡され、中へはオレンジジュースが注がれた。

「堅苦しい挨拶はめんどいから、一気に行くよ！ カンパーイ！！」
ミヤコさんの威勢のいい一声に、みんなの声が続いた。そうしてみんなコップのジュースを一気に仰いだ。私も、一口だけジュースを舐めた。

それから質問ラッシュだった。

転校って聞いたけどどこへ引っ越すの？ またこっちに戻ってくるの？ 連絡先聞いてもいい？ 引っ越し落ち着いたら遊びに行きたい？

主に女の子がメインだったが、ちらちらと男子も混ざり、その他の人たちも騒がしい私たちを見て笑っていた。大勢の人にびっくりした私をミヤコさんはフォローしてくれた。質問はひとつずつだと仕切ったり、時たま誰かをからかって周りを笑わせたり。

料理もおもしろかった。お団子や栗、豆などをメインとしたお月見料理、それらの他におにぎりやウインナーや卵焼きなどのお弁当の定番が並んでいた。クラスの女子で分担して作っただけ。ミヤコさんは、あたしは料理はからっきしでさ、なんて笑っていたが。た

だ、やはりというかこのお別れ会を企画してくれたのはミヤコさんなのだと言う。他の子から話を聞いて改めてお礼を言ったら、彼女は照れくさそうに頭をかいた。

そんな風に、楽しい時間はあっという間に過ぎた。気がつくと、もう家の者に連絡を取らなければならない時間になっていた。

「そっか、もう行っちゃうか」

ミヤコさんは残念そうに言った。

「はい」

私は本当はもっと居たい気持ちを押さえて答えた。

「みなさん、今日は本当にありがとうございました」

私はそう言って深く頭を下げた。

「必ず、私ここに帰ってきますので、その時は、よろしければまたみなさんとお会いしたいです！」

言葉にしたらずいだけ涙が出てきた。クラスメイトと仲良くなれなかったのが心残りなんて、恥ずかしい。本当はただ私の歩み寄る勇気が足りなかったのだ。でも、もう過ぎた時は戻せない。それならこれからは後悔のないように生きなくてはいけないのだろう。

「うん、あたしらも同じ気持ちだよ。だから、さよならじゃなくてさ」
ミヤコさんはそう言って一度背後のクラスメイトと目を合わせる
と、

「またな！」

二カつと笑って手を振った。

「はい！」

私も笑って手を振ると、涙をこらえて屋上を後にした。

学校を後にすると、私はすぐに携帯を打った。

『私、もう少しだけ地球に残ってもいいかしら?』

私は携帯を満月へ掲げて送信ボタンを押した。

結果発表

お題 〓月〓

Aグループ

『毎年、名月の夜は』 13票

作者：あまつばめ

VS

『月のいきもの』 13票

作者：蜻蛉

勝者：ナシ

Bグループ

『サテライト・ガール』 14票

作者：黒木猫人

VS

『百年遅れのノストラダムス』 13票

作者： 島本静波

勝者：『サテライト・ガール』

Cグループ

『二人で月に』 8票

作者： 双色

VS

『愚者とウサ耳』 25票

作者： 阿武都龍一

勝者：『愚者とウサ耳』

Dグループ

『白色の檻』 9票

作者： ろりら

VS

『月に携帯を掲げて』 21票

作者： 天野雀

勝者：『月に携帯を掲げて』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3087i/>

第四回SSバトル企画・会場

2010年10月21日00時07分発行